

## 第3回 2ファクタモデルの推定

SEMの第三回目です。今回の目的はこれまでの知識を利用して2ファクタモデルを推定することです。そして、第2回の最後に少し触れた“識別”について、もう少し詳しく解説します。

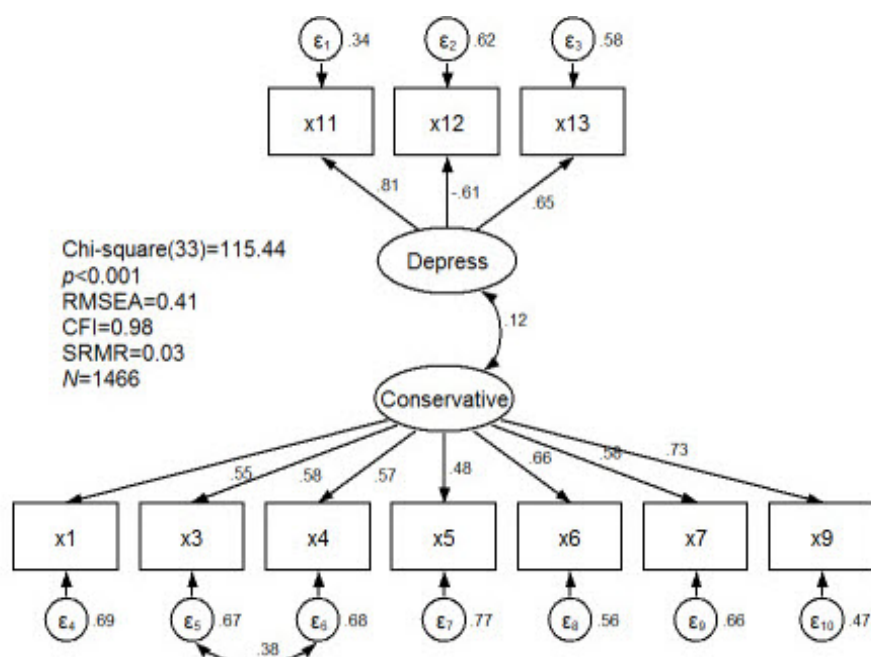
利用する書籍は Alan C. Acock, 2013. *Discovering Structural Equation Modeling Using Stata, Revised Edition*, Stata Press の第一章の後半です。

## 第3章 2ファクタモデル


ここでは潜在変数である Conservative と Depress の統計的な関係を考察する。

### 3.1 パス図の作成

最初にここで作成する 2 ファクタモデルを以下に示す。




- SEM ビルダーを使って次のような手順に従って作成する。

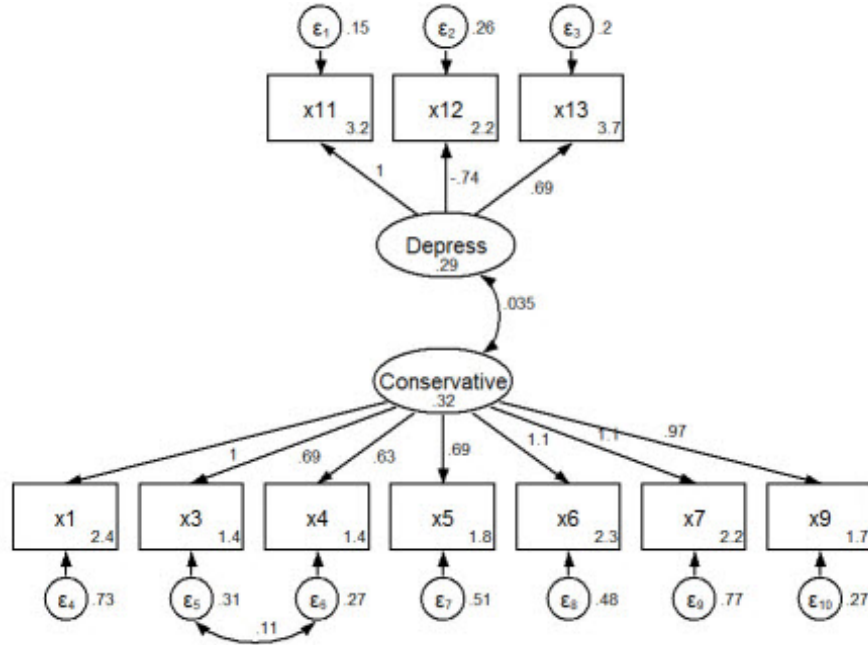
- 今回のように計測可能な変数  $x$  が多い場合は SEM ビルダの画面で  のアイコンをクリックする。そして上部の Depress を作図する。測定変数の項目には x11 x12 x13, または, x11-x13 と入力する。
- 次にもう一度同じアイコンをクリックし, Conservative の部分を作成する。この時, ダイアログの下部にある次に示す項目で計測の向きを調整する。同じく測定変数の項目に x1 x3-x7 x9 と入力する。

定数を推定しない

測定の向き:

下

3. 共分散を設定する箇所に  のアイコンを利用して両矢印の曲線を引く。
4. 作図が完了したら, SEM ビルダーで推定/推定と操作する。



この図をもう少しスッキリさせることを考える。

- 潜在変数 (楕円)Depress と Conservative の分散を非表示にする  
SEM ビルダで設定/変数/すべての潜在変数と操作する。次に示す結果のタブで, 分散の項目を「なし」に変更する。




- 観測可能な変数 (矩形) の定数項を非表示にする  
設定/変数/線形の内生観測変数と操作する。結果のタブで切片とあるところを「なし」に変更する。

- 標準化回帰係数を表示する

表示/標準化回帰係数を表示と操作する。推定値が更新されたら、Stata のコマンドウィンドウを表示し、適合度検定のコマンドを実行する。

```
. estat gof,stats (all)
```

Fit statistic	Value	Description
Likelihood ratio		
chi2_ms(33)	115.438	model vs. saturated
p > chi2	0.000	
chi2_bs(45)	3630.536	baseline vs. saturated
p > chi2	0.000	
Population error		
RMSEA	0.041	Root mean squared error of approximation
90% CI, lower bound	0.033	
upper bound	0.050	
pclose	0.958	Probability RMSEA <= 0.05
Information criteria		
AIC	30276.919	Akaike's information criterion
BIC	30446.209	Bayesian information criterion
Baseline comparison		
CFI	0.977	Comparative fit index
TLI	0.969	Tucker-Lewis index
Size of residuals		
SRMR	0.033	Standardized root mean squared residual
CD	0.952	Coefficient of determination

- 仕上げとしてパス図に適合度検定の一部の情報を追加する。
- テキストアイコン  をクリックしてモデルの適合度に関する情報を次のように入力する。

```
Chi-square(33)=115.44
{it:p}<0.01
RMSEA=0.41
CFI=0.98
SRMA=0.03
{it:N}=1466
```

- {it:p} は p をイタリックで表示する書式である。

#### 分析チェック

SEM による分析の結果、2 つの潜在変数 Depress と Conservative の間の相関は弱いことが分かった。

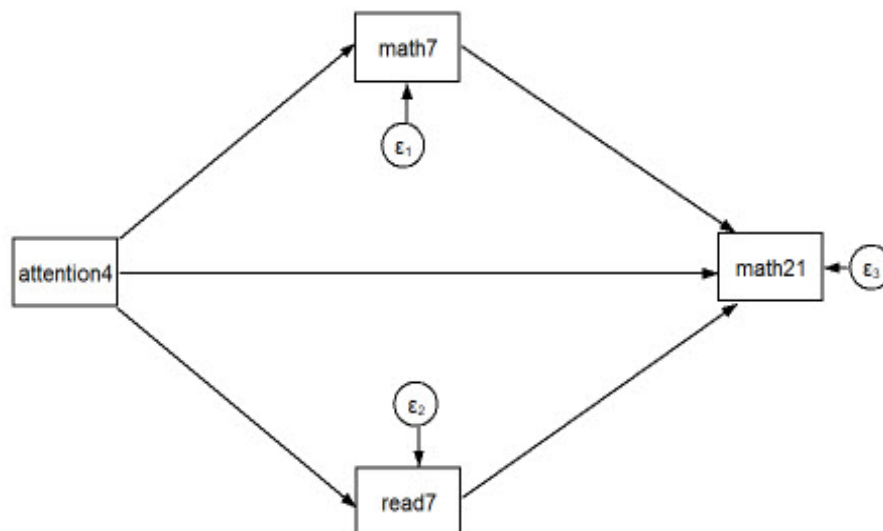
## 3.2 パスモデル

ここでは SEM を利用してパスモデルを推定する。<sup>1</sup>

- このセクションで紹介するパスモデルの特徴は観測可能な変数だけを利用する事.
- 一般的な連立方程式を考える訳であるが、ポイントは誤差項間の相関の設定にある.

### 幼児期の集中力と学力の関係

- McClelland et al. (2013) のデータ path.dta を利用して 4 才の時の集中力の持続性と学力の関係を仮説検定する.
- 中間変数として 7 才の時の読解力と計算力を利用する.
- データを開いたら、次に示すパス図を SEM ビルダーで作成する.



- SEM ビルダーのウィンドウにある推定メニューを利用してモデルを推定する.
- 欠損値はランダムで、変数が正規分布に従うことを仮定して推定手法は `mlmv`(欠損値のある) を利用する.
- 推定ダイアログのレポートタブで、「標準化係数と値を表示する」を選択する.

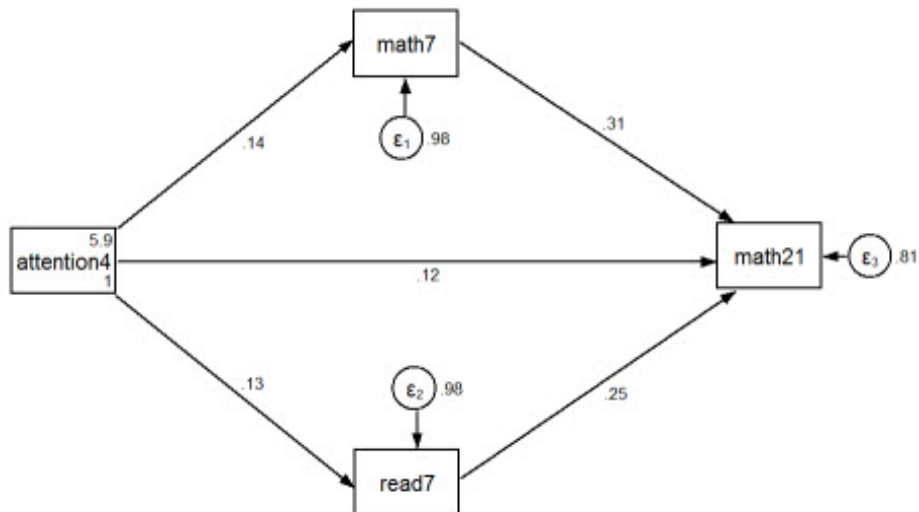
<sup>1</sup>Alan C. Acock, 2013. *Discovering Structural Equation Modeling Using Stata, Revised Edition*, Stata Press の第 2 章にある A substantive example of a path model の要約になります.

```
. sem (attention4 -> math7, ) (attention4 -> read7, ) (attention4 -> math21, ) (math7 -> math21, ) (read
> 7 -> math21, ), method(mlmv) standardized
Endogenous variables
Observed: math7 read7 math21
Exogenous variables
Observed: attention4
Fitting saturated model:
(省略)
Structural equation model          Number of obs    =      430
Estimation method = mlmv
Log likelihood    = -4246.557
```

Standardized	OIM		z	P> z	[95% Conf. Interval]	
	Coef.	Std. Err.				
Structural						
math7 <-						
attention4	.141458	.0486307	2.91	0.004	.0461437	.2367723
_cons	3.04888	.3344304	9.12	0.000	2.393408	3.704351
read7 <-						
attention4	.1289838	.0491968	2.62	0.009	.0325598	.2254077
_cons	3.163475	.3383925	9.35	0.000	2.500238	3.826712
math21 <-						
math7	.3075685	.0481426	6.39	0.000	.2132108	.4019262
read7	.2520422	.0489132	5.15	0.000	.156174	.3479104
attention4	.1171187	.0467622	2.50	0.012	.0254664	.208771
_cons	1.380531	.361878	3.81	0.000	.6712636	2.089799
var(e.math7)	.9799896	.0137584			.9533913	1.00733
var(e.read7)	.9833632	.0126912			.9588009	1.008555
var(e.math21)	.8075246	.0341705			.7432537	.8773531

LR test of model vs. saturated: chi2(1) = 27.56, Prob > chi2 = 0.0000

パス図は次のようになる。



## 分析チェック

- math7 に対して attention4 は有意である (符号は正).
- read7 に対しても有意である (符号は正).
- math21 に対して math7 と read7 はどちらも有意であり, math7 の影響が大きい
- math21 に対する attention4 の効果は有意であるが, math7 と read7 よりも小さい.

## 内生変数の分散に対する考察

内生変数の分散に対するモデルの説明力を考察する.

```
. estat eqgof
```

Equation-level goodness of fit

depvars	Variance			R-squared	mc	mc2
	fitted	predicted	residual			
observed						
math7	7.621122	.1525014	7.46862	.0200104	.141458	.0200104
read7	64.70388	1.076467	63.62742	.0166368	.1289838	.0166368
math21	6.920939	1.33211	5.588828	.1924754	.4387202	.1924754
overall				.0515245		

mc = correlation between depvar and its prediction

mc2 = mc^2 is the Bentler-Raykov squared multiple correlation coefficient

- 観測した変数 math7 と read7 について, モデルで説明可能な分散の割合は 2% 程度である.
- 一方, math21 に対する説明力は 19% 程度ある.

$$R^2 = \frac{\text{内生変数の分散の予測値}}{\text{内生変数の分散}}$$

- mc2 (Bentler-Raykov  $R^2$ ) は非再帰形モデルの場合に参照する

## モデルの適合度に対する考察

- 適合度の考察を行う.

```
. estat gof,stats(all)
```

Fit statistic	Value	Description
Likelihood ratio		
chi2_ms(1)	27.561	model vs. saturated
p > chi2	0.000	
chi2_bs(6)	130.877	baseline vs. saturated
p > chi2	0.000	
Population error		
RMSEA	0.249	Root mean squared error of approximation
90% CI, lower bound	0.174	
upper bound	0.332	
pclose	0.000	Probability RMSEA <= 0.05
Information criteria		
AIC	8515.114	Akaike's information criterion
BIC	8559.816	Bayesian information criterion
Baseline comparison		
CFI	0.787	Comparative fit index
TLI	-0.276	Tucker-Lewis index
Size of residuals		
CD	0.052	Coefficient of determination

Note: SRMR is not reported because of missing values.

- 尤度比検定の項目で  $\chi^2(1) = 27.56, p < 0.001$  とありますから、共分散構造をモデルで再現できていないことが分かる。
- 誤差に関する項目から RMSEA が約 0.25 で、0.05 以下という規準を大きく上回っており、誤差が大きすぎる事が分かる。
- CFI の目安である 0.9 をクリアしていない

#### 変数間の相関

変数間に相関を設定することによってモデルがどの程度、改良できるか次のコマンドによって調べる。

```
. estat mindices
```



## Modification indices

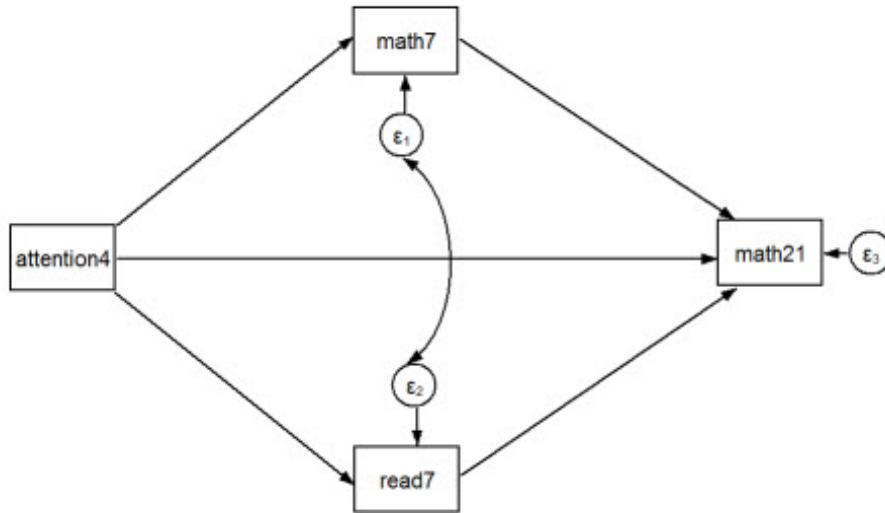
	MI	df	P>MI	EPC	Standard EPC
Structural					
math7					
read7	26.885	1	0.00	.0899778	.2621748
math21	26.885	1	0.00	1.091552	1.040202
read7					
math7	26.885	1	0.00	.7665476	.2630773
math21	26.885	1	0.00	2.615316	.8553455
cov(e.math7,e.read7)	26.885	1	0.00	5.725053	.2626257

EPC = expected parameter change

- カイ二乗検定統計量はどこに相関を設定しても同じ値だけ減少し、モデルを改良することが分かる
- 時間の流れを考えて、math21 から read7 や math7 に与える影響は存在しないので、実質的な意味はない。
- 計算に際し、問題文を読む力が必要とされるケースでは read7 から math7 への影響は考えられる。
- しかし、その逆は考えづらい。
- 計算力や読解力に子供の家庭の社会的地位が影響したり、性差が影響すると考えることができるなら誤差項の間に相関を考えることは合理的である。

### 3.3 誤差項の相関

- math7 と read7 の誤差項間に相関を設定する。
- 先のモデルの推定結果から自由度が 1 であることが分かる。
- ここで新たに共分散を設定すると perfect fit になり、自由度がゼロになるが、設定に合理性があれば、自由度ゼロを気にする必要はない。



このパス図を使って、標準化係数を mlmv によって推定した結果を次に示す。

```
Structural equation model                Number of obs    =      430
Estimation method  =  mlmv
Log likelihood     = -4232.7763
```

Standardized	Coef.	OIM Std. Err.	z	P> z	[95% Conf. Interval]	
<b>Structural</b>						
<b>math7 &lt;-</b>						
attention4	.1424678	.0485568	2.93	0.003	.0472983	.2376373
_cons	3.043008	.3341487	9.11	0.000	2.388089	3.697928
<b>read7 &lt;-</b>						
attention4	.1296611	.0491074	2.64	0.008	.0334123	.22591
_cons	3.162223	.3378934	9.36	0.000	2.499964	3.824482
<b>math21 &lt;-</b>						
math7	.3008525	.0467369	6.44	0.000	.20925	.3924551
read7	.2462258	.0473568	5.20	0.000	.1534081	.3390434
attention4	.1147871	.0460627	2.49	0.013	.024506	.2050683
_cons	1.365485	.3571808	3.82	0.000	.6654235	2.065547
<b>var(e.math7)</b>						
	.9797029	.0138355			.9529576	1.007199
<b>var(e.read7)</b>						
	.983188	.0127347			.9585427	1.008467
<b>var(e.math21)</b>						
	.7779759	.0384575			.7061369	.8571234
<b>cov(e.math7,e.read7)</b>						
	.2599788	.0469642	5.54	0.000	.1679306	.352027

LR test of model vs. saturated: chi2(0) = 0.00, Prob > chi2 = .

分散の説明力を確認します。

```
. estat eqgof
```

Equation-level goodness of fit

depvars	Variance			R-squared	mc	mc2
	fitted	predicted	residual			
observed						
math7	7.619575	.154655	7.46492	.0202971	.1424678	.0202971
read7	64.62929	1.086548	63.54274	.016812	.1296611	.016812
math21	7.178428	1.593784	5.584644	.2220241	.4711943	.2220241
overall				.0448891		

mc = correlation between depvar and its prediction

mc2 = mc^2 is the Bentler-Raykov squared multiple correlation coefficient

- math7 と read7 の分散の説明力はほぼ変化しない
- math21 に関しては 0.19 から 0.22 に向上している
- 今, 自由度はゼロなので estat gof,stats(all) や estats mindices コマンドに意味はない

### 3.4 各種効果の推定

パス図を見ると math21 に対して 3 つの矢印が引かれている

- attention4 からの効果を「直接効果」と呼ぶ
- math7 および read7 を経由している効果は「間接効果」と呼ぶ
- 2 つの効果は次のコマンドを用いて一覧表示できる

```
. estat teffects,standardize
```

## Direct effects

	OIM				Std. Coef.
	Coef.	Std. Err.	z	P> z	
Structural math7 <- attention4	.1290411	.0446933	2.89	0.004	.1424678
read7 <- attention4	.342035	.1313072	2.60	0.009	.1296611
math21 <- math7	.2920135	.0470959	6.20	0.000	.3008525
read7	.0820604	.0161567	5.08	0.000	.2462258
attention4	.1009146	.0408745	2.47	0.014	.1147871

## Indirect effects

	OIM				Std. Coef.
	Coef.	Std. Err.	z	P> z	
Structural math7 <- attention4	0	(no path)			0
read7 <- attention4	0	(no path)			0
math21 <- math7	0	(no path)			0
read7	0	(no path)			0
attention4	.0657493	.0202659	3.24	0.001	.0747877

## Total effects

	OIM				Std. Coef.
	Coef.	Std. Err.	z	P> z	
Structural math7 <- attention4	.1290411	.0446933	2.89	0.004	.1424678
read7 <- attention4	.342035	.1313072	2.60	0.009	.1296611
math21 <- math7	.2920135	.0470959	6.20	0.000	.3008525
read7	.0820604	.0161567	5.08	0.000	.2462258
attention4	.1666639	.0440972	3.78	0.000	.1895748

- 大切な情報は右端の Std. Coef. にある標準化係数である
- 1番上のテーブルは直接効果, つまり, 間に変数が介在していない部分の効果を示している
- これは普通の標準化係数の出力と同じ
- 2番目のテーブルは間接効果を示している
- つまり, attention4 から math7 と read7 を経由している効果で 0.074.

$$0.074 = 0.142 \times 0.300 + 0.129 \times 0.246$$

- 最後のテーブルは直接効果と間接効果を合計したもの
- 標準化した右端の列をみると分かり易い

それぞれの効果をまとめてみると、次のようになる。

アウトカム	直接	間接	合計
Math7			
attention4→math7	0.14**	-	0.14**
Read7			
attention4→read7	0.13**	-	0.13**
Math21			
attention4→math21	0.11*	0.07**	0.19***
math7→math21	0.30***	-	0.30***
read7→math21	0.25***	-	0.25***

- 有意水準は非標準化の情報を示している
- \* $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$ , \*\*\* $p < 0.001$

### 簡単なまとめ

- 潜在変数を利用した2ファクタモデルを推定し、観測できない潜在変数間の関係をモデル化した
- 全て観測可能な変数だけを用いた連立方程式モデル(パスモデル)を式を記述する代わりにパス図を用いて構築し、係数を推定した